九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「不十分終止」の史的展開 ： 旧終止形残存の文法史的意義

京, 健治
九州大学大学院（博士課程）

https://doi.org/10.15017/9441

出版情報：語文研究. 75, pp.1-10, 1993-06-06. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

「不十分終止」の史的展開

――旧終止形残存の文法史的意義――

京　健治

1　本稿の目的

室町期における活用語の大きな変動のひとつに、終止連体形合一があげられよう。つまり、前代には連体形として使われていた語形が文を終止させる機能をも果たすことが一般化し、それまで終止形として使われていた語形は使われなくなる、という現象である。

ところが、中世の口語資料とされるキリシタン資料や抄物に口語では用いられないとされる旧終止形がしばしばみられるのである。[1]

例えば、『天草版平家物語』[2]には、

1忠盛も伝へ聞いて思はるるは：われは長袖の身でもなし，武士の家に生まれた者が、　（4）

2さて五智院の但馬は長刀の鞘をはづし，甲の錣をかたむけて、橋は引いつ，敵にはあひたし，錣をかたむけて立ったところに、　（126）

のような例（1では形容詞「し」語尾、2では助動詞「つ」「たし」）がみられるのである。これらは一般には当時の口語において消滅したとされる旧終止形である。擬古文等に旧終止形がみられてもさほど国語史上の問題とはなりにくいであろう。しかし、少なくとも中世以降の口語資料として位置付けられているキリシタン資料・抄物資料ならびに狂言資料にみられることは注目していいし、国語史的意義を考えることは無意味なことではなかろう。今回、この問題を取り上げるのはこれら旧終止形が終止連体形合一後にも何故に残り得たのか、という点もさることながら、旧終止形が口語の世界に生き続けたと考えることによって、これまで明らかにされ得なかったいくつかの問題が解決できるのではないかという考えがあってのことである。そのうち、本稿では次の二つの問題を取り上げることにする。

(1)接続助詞「し」の成立事情

(2)助動詞「うず」「うずる」の併存状況

2　中世の口語資料にみられる旧終止形

中世の口語資料にみられる旧終止形には次のようなものがみられ

る。まず、キリシタン資料から見ていくことにする。

2・1 『天草版平家物語』

『天草版平家物語』における旧終止形を分類整理すると次の通りである。

(1) 形容詞旧終止形

3妓王はされば とて今さら人に対面して，遊びたはむれうずることでもなければ，文をとり入ることもなし，まして使ひにあひしらふまでもなかった．（98）

4駆けやぶって通らうとするところで，暗さは暗し，しかしか入道の孫とも知らず，（15）

(2) 助動詞旧終止形

(a)「つ」

5すでに船をいださうずるとひしめきあへば，俊寛乗ってはおり，おりては乗っつ，あらましごとをせられた．（75）

6この北の方は新大納言の娘で，この腹に六代御前と申して十におなりある若者もござっつ，夜叉御前と申して，八つにおなりある姫君もござったが，（184）

(b)「たし」

7さて五智院の但馬は長刀の鞘をはづし，甲の緒をかたむけて，橋は引いつ，敵にはあひたし，緒をかたむけて立ったところに，（126）

(c)「なり」

8実盛心は猛けれども，老武者なり，手は負うつ，二人の敵をあひしらはうとするほどに，手塚が下になって，つひに首をとられた．（170）

2・2 狂言資料

さらに、キリシタン資料にみられた旧終止形は狂言台本にも見出される。

(1) 形容詞旧終止形

9耳も遠し、目も悪し、中にも、腰がかがうて、月日が、拝まれいで、是が、迷惑な（狂言六義「腰折」）

10愚僧が思ふは夜も長し、夜もすがら宗論をして、どちなりともありがたいと聞きいれた方の弟子にならうと思ふが、何とあろうぞ（虎明本「しうろん」）

11此扇子は京扇子でもなし、又さし古しもせぬものを、是をそなたへおまするでもおりないぞ。（虎寛本「入間川」）

(2) 助動詞旧終止形

(a)「たし」

12相撲は見たし・相手はなし・しよせん身共かとらうといへト云（和泉家古本『六義』「鼻取相撲」）

(b)「つ」

13ことはりは中つ・木の本て御酒をまいれト云テ（和泉家古本『六義』「花折新発意」）

(c)「たり」

14出ばやとはおもへども、もつといは取たり、五本付はつけたり、爰成窓からちよかと見て、入つ出つもだえた。（虎寛本「麻生」）

キリシタン資料に比べて、使用語彙にやや偏りがみられるものの、やはり形容詞旧終止形や助動詞「つ」は比較的用いられている。

これまでみたようにキリシタン資料、狂言資料には当時一般の口語では消えたとされる助動詞「つ」「ぬ」「たり」「なり」の旧終止形や形容詞旧終止形が共通してみられるのである。このことは旧終止形が何故に中世以降の口語資料にみられるのかを考えるうえで大変重要である。というのは確かに口語資料とはいっても書き言葉には違いないから、たまたま古語（口語では用いられない）が混入しているだけなのだとする見方も可能である。特に『天草版平家物語』のように原拠本のある文献に関しては原拠本中の古語がそのまま引用されただけであるともいえるであろうが、それにしてはその用例が形容詞、助動詞「つ」「ぬ」「たり」「なり」などに限られており、さらにそれらがいくつかの異なる資料にも共通してみられることなど偶然とはおもえないのである。

原処本中の古語がたまたま『天草版平家』にも引用されただけではないかという点に関しては、そうとは言いきれないようにおもう。

『天草版平家』（184ページ）に「つ」の旧終止形がみられるが、

6この北の方は新大納言の娘で，この腹に六代御前と申して十になりある若者もござっつ，夜叉御前と申して，八つになりある姫君もござったが，…（184）

原拠本に近いとされる「百二十句本」では、この箇所は次のようになっている。

「…此腹ニ・六代御前トテ・十歳ニナラセ玉フ・若君ヲワシマス・夜叉御前トテ・八ニナラセ玉フ・姫君マシマス・…」（巻第七六九）

このように一致していないのである。こういった例がみられることは、旧終止形「つ」が当時の口語にも生きていたことの根拠となりうるとおもわれる。

やはり、これら旧終止形が当時の口語にも生きていたために口語資料であるキリシタン資料、狂言資料にみられると考えたほうがよいのではないだろうか。

3　旧終止形の用法

連体形終止の一般化に伴って、終止形は連体形にその座を奪われていくのであるが、その消滅した終止形の中に残存したものがあるということは、そこに〈何らかのある特殊な表現価値〉があったのではないかと推察される。

以下、旧終止形の用法を検討する。

まず、『天草版平家物語』中の旧終止形をみてみると、

15この北の方は新大納言の娘で，この腹に六代御前と申して十になりある若者もござっつ，夜叉御前と申して，八つになりある姫君もござったが，（184）

16五月雨のころであったれば，村雨の絶え間の月のいでたに，敵は無案内なり，わが身は案内者なれば，（111）

17こゝは山も高し，谷も深し，四方は岩石ぢやほどに，搦手へもたやすうはよもまはらじ，（165）

18甲の緒をかたむけて，橋は引いつ，敵にはあひたし，緒をかたむけて立ったところに，（126）

15は助動詞「つ」，16は「なり」，17は形容詞旧終止形であるが，これらの用法はいづれも中止法となっている。17は「山も高し，谷も

深し」のように形容詞旧終止形が、18では「つ」と「たし」のように助動詞旧終止形による中止法の並列した例である。

このように『天草版平家物語』の旧終止形を検討したところ、それらは、「つ」であれ、「たし」であれ、形容詞であれ、いづれも「意味が十分に切れずに下に続いていく用法」といえる。

それでは、狂言資料ではどうであろうか。

狂言台本の旧終止形の用法も『天草版平家物語』の例同様、「そこで文が終止するのではなく、後に続く感じのする用法」（以下、「不十分終止」用法とよぶ。[3]）であることが指摘できるのである。

19相撲は見たし・相手はなし・しよせん身共かとらうといへト云
（和泉家古本『六義』鼻取相撲）

14出ばやとはおもへども、もつといは取たり、五体付はつけたり、爰成窓からちよかと見て、入つ出つもだえた。（虎寛本「麻生」）

19・14には助動詞「たし」「たり」「つ」、形容詞「なし」の旧終止形がみられるが、これらもその用法は中止法であるといえよう。

19では「相撲は見たいし、相手はないし…」のような用法である。抄物の例は省くが、これも狂言資料やキリシタン資料同様、中止法であった。

さて、ここで、キリシタン資料、狂言資料にみられた旧終止形についてこれまでに明らかにしたことを整理しておきたい。

(1)形容詞旧終止形、助動詞「つ」「ぬ」「たり」「なり」「たし」などが共通してみられる。

(2)旧終止形の用法は「不十分終止」用法である。（対句的表現を構成する例が多い。）

(1)(2)から、旧終止形には終止連体形合一後にも「不十分終止」として残存したものがあったと考えてもよさそうである。

次の例は旧終止形と新終止形とが一文に現われたものであるが、

20そうじてそれがしハ、人の行なといふ所へハゆきたし、又ミなといふものハミたい、此ぶすハちとミたい事でハないか
（祝本「ぶす」）

14出ばやと思へ共、元結は取つたり、額付けは付けたり、こゝなる窓でちよかと見て、入つ出つ悶へた　（狂言六義「三人夫」）

20は前句が旧終止形であり、後句が新終止形の対比が明瞭な例である。14については旧終止形と新終止形との対比ではないが、旧終止形による中止法「つ」と口語終止形「た」による言い収めとなっている点に着目したい。このように旧終止形による中止法と新終止形による「一般の文終止」とが併存しており、旧終止形が中止法として積極的な働きをしているのである。

それでは、旧終止形を用いるとなぜ「不十分終止」となるのであろうか、その点についても触れておかねばなるまい。

この「不十分終止」のような表現法が文献上よくみられるようになるのは『今昔物語集』や『平家物語』あたりから、との指摘が既になされている。[4]

そこで、このような終止連体形合一以前における終止形による「不十分終止」の例を詳しくみてみると、これらのなかでもっとも多くみられるのが形容詞の例である。例えば、

21心地ハ悪シ寝入テ物ハ不見ズ成ヌレバ…　（今昔）

22其勢纔に三百余騎、北の門、縫殿の陣をかため給ふ。所はひろし、勢は少し、まばらにこそみえたりけれ　（平家）

「つ」「ぬ」の例もみられる。

23船ハ疾ク出ツ虎ハ落来ル程ノ遅ケレバ…　（今昔）
24高橋心はたけくおもへども、運やつきにけん、敵はあまたあり、いた手はおうつ、そこにて遂にうたれにけり　（平家）
25年ハ罷リ老ヌ罪ニハ員モ不知ズ造リ積テ候フ　（今昔）
26斉藤別当心はたけくおもへども、いくさにはしつかれぬ、其上老武者ではあり、手塚が下になりにけり　（平家）

こういった「不十分終止」の特徴としては、対句的表現をとるものが多いということもあげられる。

さらに、既に指摘したとおり、終止連体形合一以前の「不十分終止」に多く現われた形容詞や「つ」「ぬ」「たり」「なり」が、中世以降の口語資料においても「不十分終止」として用いられているのである。こういったことから、旧終止形の残存理由を考えてみると、終止連体形合一以前に用いられた「不十分終止」による表現が終止連体形合一後にも、「不十分終止」用法として口語の世界に生き続けていったものであろうと思われる。

4　「不十分終止」の史的展開

キリシタン資料、ならびに狂言資料といった中世の口語資料にみられる旧終止形を検討した。これら旧終止形は「終止形でありながら意味が十分に切れずに下に続いていく用法（不十分終止）」として用いられていた。つまり、キリシタン資料、ならびに狂言資料といった中世の口語資料にみられる旧終止形は、たまたまそういった古形が口語資料に混入したというのではなく、「不十分終止」という、ある特殊な用法ゆえに生き続けたものなのである。このように旧終止形のなかに「不十分終止」用法として終止連体形合一後にも残存したと考えることにより、従来問題とされてきたいくつかの言語現象が説明され得るのである。

4・1　接続助詞「し」の成立事情

形容詞旧終止形が「不十分終止」用法として生き続けていたが、この用法を背景として生じたのが接続助詞「し」である。

接続助詞「し」の成立に関しておさえておきたいのが、次の二点である。

①「まじし」という語形がみられること。

27今コヽニイマメカシク次公カ字ヲ引キコトモヲカシヽ、又宋彦材カコトヲ次公カ引クコトモアル　マシヽ、イツレ辺ニ彦材ノ二字ハアマリテ見ヘタ
28蛟ヲキリ虎ヲ刺ヤウナル事ハ我ハ老テ無力程ニナル　マシヽ、又此ノ剣ヲ佩ハ官吏カ帯牛佩犢ト云テシカルヘキソ
（『四河入海』2例とも）(5)

この「まじし」の用法は2例とも「不十分終止」である。また、この「まじし」なる語形は形容詞終止形の「不十分終止」と深く関わっていると思われる。ここでもう一度、形容詞の「不十分終止」の例を示そう。

29愚僧が思ふは夜も長し、夜もすがら宗論をして、どちなりともありがたいと聞きいれた方の弟子になろうと思ふが、何とあろうぞ　（虎明本「しうろん」）

一般の文終止と「不十分終止」との差異を再検討してみると、例えば、(a)を旧終止形による「不十分終止」用法、(b)を新終止形によ

る一般の文終止とすれば、

(a) 愚僧が思ふは夜も長し　(b) 愚僧が思ふは夜も長い

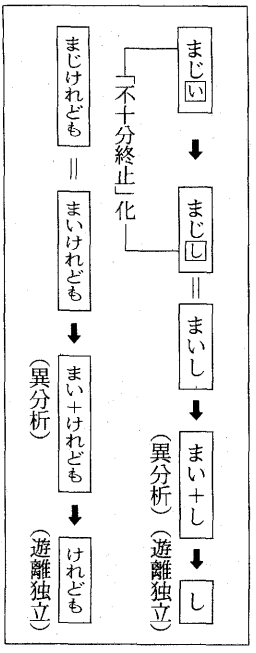
のように、両者の違いは「長し」「長い」における語尾「し」と「い」である。

当時の口語終止形である助動詞「まじい」を「不十分終止」として用いる際に、形容詞終止形の「不十分終止」の用法にならい、「まじい」の「い」を「し」とすること。(まじい→まじし)により「不十分終止」として用いたものであろう。そして、「まじい」に形容詞終止形の「不十分終止」の用法が適用されたのはそれが形容詞型活用であるという形容詞との近似性によるところが大きいとおもわれる。

②「し」の初期の例および上接語の広がり方

接続助詞「し」の初期の例が「まい・う」に下接する形で現れること。特に「まい」に下接する例(「まいし」)が先行すること。その後、動詞・助動詞に勢力を伸ばし、そして、形容詞に下接するようになる。さらに、接続助詞「けれども」の成立事情(「まい」が関与したこと)[6]と先の上接語の広がり方が「けれども」のそれと同じ様相を呈すること。

以上のことから、「し」は図のような過程を経て成立したと考えられる。(参考までに「けれども」の成立過程も示した。)



接続助詞「し」は「不十分終止」として用いられた「まじし」という語に引かれて生じた「まいし」から遊離独立して助詞化していったのである。このように考えれば、活用語の終止形に接続する—口語においては文末に「し」を下接する—という用法とも整合するし、何よりも「し」の遊離独立していくことに無理がないように思われる。

4・2　助動詞「うず」「うずる」の併存状況

30此れ文関東に見れば、人も失はうず、我身も果てうずる。(天草版平家物語)

31左右無う走り出るならば、あれも逃げうず、所詮武略をして近付かうずる。(天草版伊曽保)

室町期におけるこのような「うず」と「うずる」との併存状況は、連体形終止の一般化に対する例外的な現象を示すものとして注目され、これまでにも多くの論考がだされてきた。特に、その通時論的解釈をめぐっては大塚光信・山内洋一郎氏に論考がある。[7]

(1)終止連体合一に際し、終止形「うず」が一旦、連体形「うず

る」を包括し、その後「うずる」が勢力を増していくという変遷の過程を示している。（大塚説）

(2)助動詞「ウズ」も他の活用語同様、連体形が終止形を包括し、終止連体両形は「うずる」となった。そして、終止法にみられる「うず」という語形については終止連体合一後に新終止形である「うずる」の「る」が脱落したものである。（山内説）

大塚論文のように「ウズ」を終止形連体形合一の唯一の例外とするには解決すべき多くの問題が残されているといえよう。それよりは、山内論文のように「ウズ」も活用語一般の動きに合わせて連体形が終止形を包括したと考えるほうが無理がなさそうである。となれば、終止連体両形にあらわれる「うず」という語形が問題となってくる。山内氏は「うずる」の「る」脱落とされるが、この点に関しても問題点がないわけではない。この「うず」という語形に関して、筆者は旧終止形である「うず」が「不十分終止」として終止連体形合一後にも生き残り得たものと考えている。その根拠としては、「うず」の用法があげられる。「うず」の用法の特色としては

1　文終止となる用法が多い。

2　対句的表現乃至中止法に用いられる。

といったことが指摘されている。(8)

いくつか例を示すならば、

32ひとつきの内を、廿五日は上京へまいらふず、五日そなたへゆかふ　（虎明本「どん太郎」）

33三十一字よりおほひもあらふず、すくなひもあらふまでよ　（虎明本「はぎ大名」）

34身共は御酒を一つたぶるほどに、夏は酒をひやしすまひてたもらうず、冬はかんをしすまひて、馬にかつこうするほどのましてやもらうず、身共はぶたつしや者じや程に、　（虎明本「人馬」）

32・33は「うず」の対句的表現の前句に「不十分終止」としてみられた例である。34は「不十分終止」の「うず」が並列した例である。「うず」のこのような特色は旧終止形の「不十分終止」と一致するのである。

第三節でみたように旧終止形による「不十分終止」用法も対句的表現がみられた。例えば、

35されども味方は多し，敵は少なし，矢にも当たらず，かけ回るをただおし並べて組め組めと矢倉の上から下知したれども，　（天草版平家266）

36ころは十月二十日の夜なれば，暗さは暗し，雨は降る，昌尊が頼むところの兵さんざんにかけ散らされ，　（天草版平家377）

35・36の傍線を引いた箇所は対句的表現となっており、そこに旧終止形が「不十分終止」として機能している。

さらに、「うず」が旧終止形の「不十分終止」との関連を深めるものとして、「うず」と「うずる」との用法の差異があげられよう。

37「我昨の約束の如く、海の水を悉く飲み尽さうず，しかれども先づ諸の川の流れを堰きとめられい，その後海を悉く飲まうずる」　（天草版伊曽保418）

38「左右無う走り出るならば，あれも逃げうず，所詮武略をして近付かうずる」　（天草版伊曽保459）

のように、文中に「うず」が、文末に「うずる」が用いられているが、この対応も次のような旧終止形の「不十分終止」、新終止形によ

る「言い収め」といった用法と一致するのである。

20そうじてそれがしは、人の行なといふ所へはゆきたし、又みなといふものはみたい、此ぶすはちとみたい事ではないか

（祝本「ぶす」）

39人のお主と云ものは・きけんのよひ事もあり又あしい事もある

（和泉家古本「日近米骨」）

「うず」「うずる」との関係は20の「たし」と「たい」のそれと同じ状況にあるとみてよいのではないだろうか。

さて、「うず」が対句的表現乃至中止法に用いられる理由として、従来次のように説かれてきた。

①山内洋一郎氏

ウズルの発音の長さ・落ち着き、ルの持つ和らかさに対し、発音の短く強い語感のウズがこのような形式に合致したのであろう。

②蜂谷清人氏

中止法ないし対句的表現を「うず（る）」の語類によって示すとすると、「うず」か「うずる」を用いなければならないわけであり、その際、同じく終止法として用いられている両形のうち、体言的・固定的感じの強い「うずる」よりも、語感上後に続く感じの強い「うず」が一般的に用いられるようになったと解しうるように思う。

③安達隆一氏

「ウズ」が一般に純粋な終止として、しかも、中止法、対句的表現に使用されるということは、「ウズ」のもつ語感・語勢の強さに由来するであろう。(9)

このように「うず」が中止法として用いられる理由を語感上の問題として処理するものが多いのであるが、これらの説はいずれも「うず」と「うずる」という二つの語形の存在を前提としており、そうした上で「うず」と「うずる」のうちでどちらを中止法として用いるかに際し、語感上続く感じのする「うず」が選ばれたと説明するのである。いうまでもなく、これらの説には何故に「うず」「うずる」が併存しているのかという根本の論証が欠けている。それよりは、〈旧終止形がある表現価値をもって終止連体形合一後にも口語として残り続けたものがあった〉こと、それら旧終止形の用法と「うず」の用法との共通性を考え合わせて、「うず」という語形について、これは本来の旧終止形であって、それが「不十分終止」という特殊な用法ゆえに終止連体合一後にも残り得たのではないかと考えたほうがよいのではないだろうか。そう考えることにより、「うず」と「うずる」の異なった二つの語形の併存も理解できるのである。

中世資料における「うず」と「うずる」の併存状況を国語史の流れに即して考えてみると、終止連体形合一に際し、助動詞「ウズ」も一般の活用語同様、連体形「うずる」が終止形「うず」を包括し、終止法・連体法ともに用いられるようになったのである。しかし、旧終止形である「うず」は「不十分終止」という特殊な言い回しに用いられることによって、残り得たということになるのである。その「不十分終止」の「うず」と一般の口語終止形である「うずる」とが併存して用いられたのであり、それを如実に反映しているのがキリシタン資料であり、狂言資料なのである。

5　おわりに

終止連体形合一後にもみられる旧終止形の用法を検討し、それが「不十分終止」といった用法ゆえに残存しつづけていたことを明らかにした。そういう流れを文法史に取り入れることにより、これまで問題とされてきた現象が説明し得るのではないか、その一試論として接続助詞「し」の成立、助動詞「ウズ」(「うず」「うずる」の二つの語形)の二つの問題を取り上げた。この何ら関連のなさそうな現象が「不十分終止」による旧終止形残存を背景としていたことが示せたものとおもうが、考察が十分でない点も多々あるとおもわれる。諸賢の批正を請う次第である。

(注)

(1)　中世以降にみられる旧終止形に関して、専ら「はさみこみ」の観点から論じられたものに出雲朝子氏「「はさみこみ」について—文法史的考察—」(『国語学』143)がある。

(2)　本書の引用は、亀井高孝阪田雪子『ハビヤン抄平家物語』による。用例の後の(　)の数字は原版のページ数である。

(3)　「不十分終止」という用語に関しては、鈴木浩氏「接続助詞「し」の成立」(『文芸研究』64)が松下大三郎氏の「不十分終止格」という用語を利用されたものであり、本稿もそれに従った。

(4)　「不十分終止」のような表現法に言及したものとしては、山田孝雄氏『平家物語の語法』このような表現法について、次のように述べておられる。

終止形の終止の用法に立てるものゝ用例中、特別の現象を呈するものあり。即ち次の如く条件を並列して示すかの如くに用るたるものなり。

船ハ少シ浪風ハハケシカリケリ踏沈メテ一人モ不残皆死ニケリ(四、二十九、オ)

暗サハクラシ雨ハキニイテ降ル道ハセハシ心ハ先ニトハヤレトモ不及力道ナレハ馬次第ニソ懸タリケル(二末、五十八、ウ)

これらは、この「終止形」にて示されたる述語を有する句が、次なる句の条件なるかの如き意味を呈するものなるを以て、普通の終止と同一視することは能はず。(傍線…京)

京極興一氏(「終止形による条件表現—「平家物語」を中心として—」(『成蹊大学文学部紀要』昭41・1)

日本古典文学大系『今昔物語集』の解説

などがある。

(5)　『四河入海』の「まじし」については湯沢幸吉郎氏『室町時代言語の研究』(216ページ)に既に指摘がある。

(6)　接続助詞「けれども」の成立に関しては、西田絢子氏「『けれども』考—その発生から確立まで—」(『東京成徳短期大学紀要』昭53・4)に詳しい。

(7)　大塚光信氏「ウズとウズル」(『国語国文』第25巻9号)山内洋一郎氏「助動詞「うず」について—連体形終止の異例として—」(『広島大学文学部紀要』23巻3号)

(8)　注(7)の山内論文の他に、蜂谷清人氏「助動詞「う」「うず」「うずる」の語形・用法に関する一考察」(『国語学』86)

(9)　「天草版平家物語の「ウ・ウズ・ウズル」について(一)—いわゆる原拠本との比較を通してみた—」(『解釈』昭47・2)

〈使用テキスト〉

。亀井高孝阪田雪子『ハビヤン抄平家物語』（吉川弘文館・昭41）
。日本古典文学大系『今昔物語集』（岩波書店）
。日本古典文学大系『平家物語』（岩波書店）
。斯道文庫古典叢刊之二『百二十句本平家物語』（汲古書院・昭45年1月）
。池田広司・北原保雄『大蔵虎明本狂言集の研究本文篇』（表現社・昭48）
。笹野堅校訂『能狂言』（岩波文庫・昭17～20）
。日本庶民文化史料集成『狂言』（三一書房・昭50）